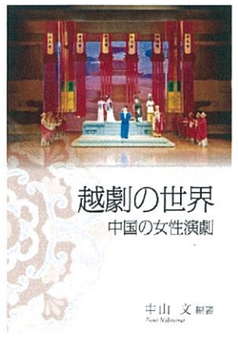
越劇の世界にようこそ！

越劇同好会代表：中山　文

梅花版『梁山伯と祝英台』　11月26日(土)15:00開演

会　場：神戸学院大学有瀬キャンパス　メモリアルホール（9号館6階）

出　演／陳雪萍（杭州越劇院）、陳飛（紹興小百花越劇団）、鄭曼莉（温州越劇団）



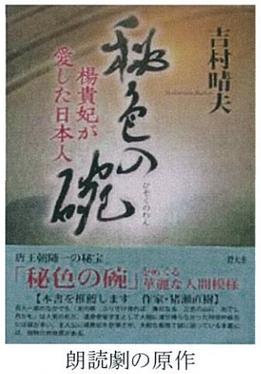
浙江省の小さな地方劇として生まれた越劇は、1940年代に上海へ進出し、女性ミュージカルに変貌して人気を集めました。今や越劇は京劇に次ぐ第二の劇種に成長しています。宝塚歌劇と同様に男女の愛情をテーマとする名作が多く、その優美な音楽と華やかな舞台は、中国全土に多くの熱烈なファンをつかんでいます。なかでも『梁山伯と祝英台』は中国の『ロミオとジュリエット』として親しまれている越劇の代表作です。

今回の見どころは、この珠玉の名作を陳雪萍（男役）、陳飛（娘役）、鄭曼莉（父親役）という3人の梅花賞受賞者の競演で上演することでしょう。「梅花賞」とは、中国演劇界が俳優に与える最高の演技賞。受賞俳優は一流の中の一流と認定された存在です。今回、越劇の梅花賞受賞者3人が顔をそろえての上演は日本初になります。真のトップ俳優が繰り広げる越劇の世界、心行くまでお楽しみください。

朗読劇「楊貴妃が愛した日本人」の発表にあたって

中国古代史同好会代表　吉村　晴夫

二胡・コーラスと合同フェスティバル



朗読劇の原作

五十路の春、私は中国に旅立った。サラリーマンとして、工場を作るためである。柳の風花（かざはな）が舞い散る黄河の畔に、中国語もわからずに、ただぼう然と一人たたずんでいた。中国について、もともと強い興味と深い造詣があった訳ではないが、心に強く残っている一冊の本があった。学生時代、井上靖著「天平の甍」の鑑真和上の生き様を読んで感動した。中国に行って最初に旅に出たのは、小説の舞台になった揚州であった。

もう一つ忘れがたい歌がある。―天の原　ふりさけ見れば　春日なる　三笠の山に　いでし月かも―。

百人一首のこの歌が好きだった。中学時代オヤジが教えてくれた。「阿倍仲麻呂は17歳で遣唐使留学生として中国に渡り大臣となり、世に名を残した。だが二度と日本の土を踏むことが出来なかった」 西安でこの歌碑に接し、1300年前の歴史を身近に感じ感激した。

望郷の一片の歌、それは雄大な大宇宙を舞台に生きる男のロマンであった。これだけ大きな詩を詠んだ日本人は他にいたであろうか。わずか、三十一文字に男の万感の思いが込められていた。天、山、月・・・。

そして、この歌の影に大きなドラマがあったのだ。私はそこから唐の歴史に魅せられ想像の世界へとのめり込んでいった。　仲麻呂とのかなわぬ愛に生き、馬嵬の悲劇で殺されずに逃亡し、日本に渡った楊貴妃。栄光と没落の人生を彩った大唐国の玄宗皇帝。光と影の孤独な生き様を送った宦官高力士。唐と奈良の人々の波乱に富んだ人生ドラマを小説に書き下ろした。

SNSの仲間がこの「秘色の碗」の小説は結構面白い、朗読劇にして発表しよう」と言う話になった。全くの素人であるが10人ほどの仲間が約1時間のシナリオ「楊貴妃が愛した日本人」を編集した。更に移情閣友の会の「二胡」「コーラス」「中国古代史」の各同好会とのコラボレーションが実現し、合同でのフェスティバルの運びとなり、12月4日生田文化会館で公演することになった。

会員の皆様のご来場を歓迎いたします。乞うご期待。

（秘色の碗の書籍は絶版のため入手困難。但し、吉村晴夫・著「秘色の碗」http://toncha.sblo.jp/category/1262891-1.htmlの短縮版をご覧頂けます）

◎友の会の行事案内や実施報告については、随時ホームページhttp://tomonokai.ko-co.jp/とFaceBook「移情閣友の会」にて情報をお届けしています。あわせてご高覧のうえ、ふるってお参加ください。
◎2016年8月20日（土）台湾国立国父紀念館での交流音楽会の動画は、下記のURTにて楽しめます。
https://www.youtube.com/watch?v=gc5L_7UomZo&feature=youtu.be

＜友の会交流広場＞

神戸孫文ゆかりの地フィールドワーク事前学習会に参加して

中文同好会　橘　雄三

のじぎく会館での事前学習会

8月26日（金）の午後、兵庫県立のじぎく会館で友の会主催「孫文ゆかりの地フィールドワーク」事前学習会が開催されました。

「フィールドワーク」は、孫文生誕150周年記念事業の一つとして11月12日（土）に実施されます。のじぎく会館は、JR元町駅を北へ出て、県庁舎1号館東端にある①「孫中山先生大アジア主義講演会の地」の銘板を左に見て北上、相楽園の東の坂をさらに上がったところです。この道の突き当り、諏訪山公園金星台には②「孫文先生諏訪山潜居の地」の銘板が設置されています。同会館は、フィールドワーク4地点の2地点に近く、「フィールドワーク」当日のスタート地点でもあり、まことに、地の利を得ています。

学習会では、孫文記念館の蒋海波主任研究員から、深い学識に裏付けられた興味深い話を聞きました。特に、②の説明には息を止め聞き入りました。1913年、袁世凱に反対する第二革命に失敗した孫文は、8月9日、亡命者として、夜陰に乗じて神戸に上陸します。刺客に狙われる孫文、それをかくまう神戸の孫文支援人士の駆け引き、一席の講談以上にスリルがありました。

学習会が終わり、途中、③中華同文学校外壁の「孫中山先生来訪之地」の銘板を確認し、関帝廟の普度勝会に参加しました。関帝廟では、長いお線香でお参りした後、友の会の林同福会長から普度勝会の説明を聞きました。ビールと精進料理がおいしかった。

2016神戸関帝廟普度勝会見学＆精進料理の会を終えて

二胡同好会　畠田　裕子

8月26日（金）神戸市中央区にある関帝廟で盂蘭盆の時期に行われる行事である水陸普度勝会に参加しました。関帝廟は三国志の英雄である関羽を祀るお寺で、華僑の方から厚い信仰を受けています。参加者は林同福会長に紙や竹ひごで作られた、死者のための住まいを表す「冥宅」について話を伺いながら、それぞれ線香をお供えしました。その後、みんなで美味しい精進料理をいただき、和やかな懇親のひとときを過ごしました。（畠田）

また、普度勝会を終えた翌29日（月）には福建華僑総会のお招きで、林会長と後藤企画運営委員長が打ち上げ会に参加し、華僑のみなさまと親睦を深めることができました。中華同文学校楊述洲校長先生の歌のあと、移情閣まつり＆交流会、孫文ゆかりの地フィールドワークなどの行事について、参加者にPRしました。林会長の声かけもあり、早速神戸華僑総会陳明徳会長ほか5名の新規入会をいただきまして感謝申し上げます。今後も華僑との連携を強化し、ともに孫文記念館を支えていきたい。（後藤補記）

「私の台湾時代とそれから」を聴講して

中文同好会　元吉　治夫

中国文化同好会9月例会は18日に講師後藤　みなみ（台湾名：王　淑麗）を迎え、芝生広場では音楽と屋台のイベントが賑やかに開催されていた、雨模様の午後、後藤みなみ女史の講演を聴講した。

1949年～87年の台湾は国民党支配下で戒厳令が敷かれて、高校では軍官が常駐で生活指導、軍事射撃訓練も行われ、また、日本語と日本文化の排除が徹底されていた。

実家は台南で故郷を忘れないように日本国籍を取得するときに、ご主人の命名で「みなみ」と名前を付けた。台湾で日本語を学んでいた彼女は留学生として日本へ1984年に来日し、日本の大手企業に就職し、現在のご主人と国際結婚。日本国籍を取得されるのに提出された様々な資料を懐かしそうに説明された。

来日後東京から沖縄県宮古島に移住し、自給自足の農業をしながら生活した。その後神戸で再就職し、非正規雇用しかなれず安い給料で、お二人の子どもを育てながら、義母の介護も経験した。現在、兵庫県男女共同参画推進員や兵庫県神戸地域ビジョン委員としても活躍されている。

日本統治時代（1895～19455年）にはインフラ整備、日本の教育に尽く した後藤新平、新渡戸稲造、八田與一などの功績もあり、今でも息づく日本精神、武士道があり、最近は漫画や和食ブームもあり日本語を学ぶ人たちも多くなった。これらのことが台湾の親日的な理由の一つと考えられる。講師の目でみた日本にはいくつかの問題点がある。例えば政治への無関心、社会格差、貧困問題など、

中文例会講演会の様子

今後女性の政治への参加が進んでゆけば、今までの政治も少しづつ変わってくるだろう。日本の良いところは人と人、人と自然、人とモノのハーモニーが素晴らしく日本大好き人間になれる。後藤さんもその一人だと言う。

友の会とのご縁は25周年記念講演の玉岡かおる先生の講演に始まる。中文同好会での仲間との出会いである。日、中、台の架け橋となる親しめる友の会の運営に心がけたいと講演をしめくくられた。

後藤さんの発案に始まる孫文検定は会員の和と輪を広げる大きな第一歩となると思うので、「孫文は人気が無いとの話に惑わされることなく、移情閣検定として呉錦堂、移情閣の建築も含めた検定として、三分の一程度は館内を細かく閲覧すれば点がとれるように仕組みを工夫されてはどうか？と期待している。